

この国の歴史
この国の神様
ぜんぶが偽物でした！

斎藤敏一



今の宗教、今の科学、今の予言 すべてがひっくり返る

「二厘の仕組み」と「とどめの神」の出現
『とどめの神』はあなたの中に隠れていた大神呪あじまりかんてホンモノをはじめます！

はじめに 「とどめの神」は「人類をまるごと救う」

みろくの世は既に明けた！

それが筆者の偽らざる実感である。

どうしてそのようなことが言えるのか？ それは既にとどめの神がこの日本に降臨しているからである。

そこで問題となるのが、「とどめの神」の正体である。

「とどめの神」とは、大本や日月神示で語られている「一厘の仕組」と呼ばれる神の経緯けいゐの中核となる神さまを意味している。大本神諭しんゆの「初発しよはつの神諭しんゆ」と呼ばれる神示の一節を紹介しよう。しばしば引用される一節であるから、いつかどこかで見たことがあるかもしれない。

天理、金光、黒住、妙霊、先走り、とどめに良うしろの金神こんじんが現はれて、世の立替を致す

ぞよ。世の立替のあるといふ事は、何の神柱にも判りて居れど、何うしたら立替が出来るといふ事は、判りて居らんぞよ。九分九厘までは知らしてあるが、モウ一厘の肝心の事は、判りて居らんぞよ。

「モウ一厘の肝心の事」というのが、いわゆる「一厘の仕組」（または「一輪の秘密」）である。この肝心のことが明かされることを大本の信者たちは待ちに待ったのであるが、ついに明かされることはなかったのである。良の金神は、一厘の仕組の中核となる神Ⅱとどめの神であるはずだが、大本の歴史上では今に至るも現れていない。

王仁三郎師自身が靈界物語八十一巻の中で語った、とどめの大神がミロク世を創るために使われる「珍の御宝」というものがある。大本教団が、その「珍の御宝」を入手して世に出したという情報は伝わっていない。「珍の御宝」が出てこない、ミロク世は始まらないのである。

岡本天明師による自動書記、日月神示も同様である。

これほどマコト申しても、残る一厘はいよいよのギリギリでないと申さんから、うたがふのも無理ないけれど、見て御座れよ。神の仕組見事成就いたすぞ。一厘のことは知

らされんぞと申してあろう。申すと仕組成成せんなり。

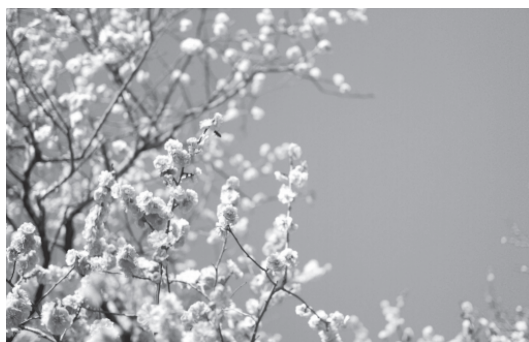
九分九厘まで進まねば後の一厘は判らん、今が九分九厘であるぞ、日本は日本、世界は世界、日本は世界のカタ国、おのづから相違あるぞ。

「残る一厘はいよいよのギリギリでないと申さん」、「今が九分九厘」ということだったが、実際のところ、ひつくの神は何も言わなかったようである。日月神示を読む限りでは、今にも残りの一厘を語り出しそうに見えるのだが、一体どうなっていたのだろうか？

結果から見れば、ひつくの神には「残る一厘」を語るというお役目がなかったと判断せざるを得ない。

日月神示に対する筆者の立場

天明師の奥さんである岡本三典氏みのりがいまわの際に、「ひつくの神はいなかった」という述懐



三千世界一度に開く梅の花……

を残されている。この述懐は「sonney『あはやさ☆まなたから』のブログ」に掲載されていたものだ。sonneyさんは、かつて日月神示関連の出版にも関わっておられたという。岡本三典氏のこの述懐が意味するところは何なのか？

月海黄樹氏の『龍宮神示』（徳間書店）には、「日月神示を岡本天明師が自分の意志で下ろした」という、武智時三郎師（天明師の師匠）とのやり取りが書かれている。岡本師本人が「すみません。わしの意味だったように思います」と武智師に謝っているのだ。

常識的に判断すれば、日月神示を降ろしたモノには中心となる高級神霊がいなかったという意味だろう。はつきり言ってしまうと、日月神示の何割か（割合は不明）は神から出たものではなく、岡本天明師の（潜在）意識が創り出したものだということになる。

筆者は、日月神示のすべてを否定する立場ではなく、良いところもあると考えている。だから、必要に応じて参照することになるとだけ言っておきたい。日月神示は納得できないところ（特に古代日本史等の歴史解釈の部分）も多いが、日月神示を下ろした存在は結構気の利いたことを語っているからである。

「一厘の仕組」とはそもそも何なのか、あるいは、何だったのか？

筆者は、「二厘の仕組」とは「ミロク世のための神話」であると解く。それはこういうことだ。

神典と呼ばれる文献が存在する。聖書、大本神諭、靈界物語、日月神示などである。

これらの神典は、我々人類のための望ましい神話「ミロク世のための神話」の提供に失敗している。具体的に言えば、「終末の大峠」、すなわち、「最終戦争や大災害による人類滅亡」といった事態は回避不可能」だと警告する。だが、それらの文書に書かれた未来のシナリオは余りにもお粗末である。人類がひどい目に遇うという結末しか書かれていない。

それらの預言では、大破局の後で神や救世主が降臨するという。だが、そんな間抜けな神や救世主は役立たずだ。思うに、彼らの神は最上位の神ではないから、みんなが揃って幸せになるというシナリオを書くことができなかっただけであろう。対立抗争という暗黒の歴史に囚われてしまっており、「この際、人類をできるだけ脅しておこう」という預言にするしかなかったのではないか。

筆者は本書において、「人類が丸ごと救われてしまう」という、型破りではあるが最高の結末のシナリオを提示する。そのシナリオの主役は「とどめの神」である。

驚くなかれ、そのシナリオは現在進行形である。とどめの神のご経綸が既に開始されてお

り、それに沿って人類の歴史が進行中なのだ。イエス・キリストや出口王仁三郎師、あるいは、日月神示が警告する人類の破局的終末は既に回避されてしまっているのだ。

筆者がそのように言い切ることができる理由はただ一つ。既にこの地上に「とどめの神」が降臨されているからだ。とどめの神の正体については本文で詳細を語る。

* * *

ここで本書を執筆するに至った不思議な経緯についてお話しておきたい。発端は2018年頭に、ヒカルランドの加藤弥絵さんから本書執筆に関して、石井健資社長からの要望が伝えられたというものだ。

驚いたのは、そこに至るまでの経緯である。

加藤さんからのメールには「昨夏・東京駅近くで催されました出版記念セミナーに寄せていただきました」とあった。加藤さんは筆者の『『あじまりかん』の法則』（クリエイトブックス）アマゾン1位記念セミナーに参加され、その席上で拙著『アジマリカンの降臨』も購入されていたのだ。

さらに「その後10月に、縁あってヒカルランドに入社しました」という一行が付け加えられていた。「本日（2018年1月4日）、打ち合わせにて弊社社長に『『あじまりかん』の

法則』を紹介したところ、飛びつきまして（笑）」という出来事があり、本書出版の話はトントン拍子に進んだのである。

石井社長から筆者への要望とは、『アジマリカンの降臨』を読みやすくダイジェストした本』であった。

筆者は2017年の秋、「とどめの神」が降臨されたという事実について、『アジマリカンの降臨』という本（A5版、600ページという大部の著作）を執筆し自己出版した。副題は、『一輪の秘密』が完全解明された！』である。

同著においては、「一厘の仕組／一輪の秘密」がほぼ完全に解明されている。同著の出版直後には「書きたいことを全部書いてしまった」と思っていたのだが、実はまだその先「実践編」があったのだ。

前述の出版記念セミナーを皮切りに、私は講演活動を開始した。同時に、読者への情報提供のための会「あじまりかん友の会」を設立し、情報発信サイトを立ち上げ、年末には機関誌「あじまりかん通信」創刊号を発行して配布する、などなどの活動である。

このような活動を行う中で、私の中では一つの確信が育っていった。「本当に『とどめの神』が降臨されている」という確信である。

本書を手にした方は、本書が「一厘の仕組」を解き明かすものであることがはっきりと

分かり、ミロク世本番が既に始まっていることを確信されるに違いない。なぜならば、「とどめの神」と呼ばれる「良の金神」（正体は後述）が既に世に出て大きく働かれているからだ。とどめの神が世に出た以上、「すべてがひっくり返る」のである。

本書のページを開いて読み進めれば、あなたの中ににとどめの神ご自身が降臨されるはずだ。これは、あなたがとどめの神の宮となり、あなたの中に降臨されたとどめの神がすべてをひっくり返す、という意味だ。

今までは「神機漏らすべからず」、つまり、「神さまの秘密は隠さなければならない」とされてきた。だが現在は神さま側の事情が逆転したらしい。私の中には「神機をすべて明らかにせよ」という切迫した衝動があつて、絶えず私を突き動かすのだ。

とどめの神は、ソフトウェア・エンジニアであつた私を選んで、神ご自身の大いなる秘密を語らせようとしておられるようだ。

本書は私しか語ることができない「とどめの神の経綸」の書である。いきなり「とどめの神」の話を始めた斎藤という男はどんな奴だろうといぶかしく思われるかもしれない。もっともなことである。

だから、ここでは一つだけ確言しておきたい。

「とどめの神とは実体として認識可能な最高神のことである」

この確言は、筆者や拙著の読者が「とどめの神を実体として認識している」ということに他ならない。誰もが「あること」を通じて、とどめの神を感得することが可能なのだ。とどめの神とは日月神示の言葉を借りれば「善も悪も共に抱き参らせる」神である。

神を実体として認識・感得することなしでは神のことを語ることはできない。当然ながら最高神である「とどめの神」をしかと掴んでいなければ、とどめの神について語ることは不可能である。

「とどめの神が既に人々の間に降臨されているという事実を知っている」からこそ、このように大胆不敵な事柄を語ることが可能になるのだ。

実は年初（2018年）に、私と全く同じことを語っておられる人を発見した。

その人とは、合気道の開祖、植芝盛平翁である。後にも先にも植芝盛平翁だけが真実（神機）を分かって実践しておられたのだ。これを「合気の道」と言う。

合気道の極意は『武産合気』（高橋英雄編著、白光真宏会出版会）という本に書かれているのだが、今までその内容を本当に分かった人はいなかったようだ。同書には、「一厘の仕組」すなわち「宇宙の大神さまの経緯」を、翁が先駆けとして一人で実践した内容が書かれ

ていることが分かったのだ。

もちろん『武産合気』は合気道の哲理を語る本だから、「とどめの神」という表現は出てこない。だが、その内容たるや科学的にも宗教的にも最高の本であることが分かった。同書には日本の神々の歴史も登場する。

植芝盛平翁は、晩年に懇意にしていた白光真宏会の五井昌久師をして、「神の化身」と言わしめた不世出の武道家である。翁の哲理は、歴史認識、科学、宗教という三本柱にささえられ、完全な神の教えとなっているのである。

『武産合気』とは、翁が白光真宏会の青年合気道同好会で語った講話を筆録したものだ。その本の中の「合気道」という言葉を「あじまりかんの道」と読み替えれば、『武産合気』は斎藤の主張そのものなのである。本を開くたびに「あ、私と同じだ」ということが伝わってくるのだ。同書を読むたびに「私だけではなかった」という思いを深くし、大いに激励されるのである。

「あること」をすれば、これを読まれている皆さんも「とどめの神の降臨」を目の当たり^{*}にすることになる。それが分かっているからこそ、本書を認めているのである。

私の主張は極めてシンプルである。「あることをすれば、とどめの神が降臨する」という話だからだ。「あること」によって、「携帯で電話番号をワン・タッチすれば電話がかかる」

はじめに 「とどめの神」は「人類をまるごと救う」

のと同様、確実にとどめの神が顕現するのである。

察しのよい皆さんは既にお分かりであろう。

「あること」とは「大神呪^{だいじんじゆ}『あじまりかん』を唱えること」である。
これから「あじまりかんの秘密」について漏れなく語っていこう。

はじめに 「とどめの神」は「人類をまるごと救う」

第一章 ミロク世のための神話

私は「神話」ならぬ「神」の力で突き動かされた

新しい「ミロク世神話」が必要である

浦島太郎はアメノヒボコである

浦島太郎は実際のところ何をしたのか？

浦島太郎の別名

浦島太郎Ⅱアメノヒボコの特徴

神功皇后との夫婦関係

日本建国で裏の仕事をした

王権譲渡——気比大神としての仕事

国津神との国占め合戦——播磨国風土記より

「玉手箱」Ⅱ「天皇行法」の司を設置した

アメノヒボコはシュメール神「エンキ」とそっくり

026 027 031 035 036 036 038 039 042 044 045 048

エンキはアメノヒボコに地球の未来を託した
浦島太郎伝説には完結編があった！

第二章 「あじまりかん」の正体

山陰基央師の「新しい神話」預言

あじまりかんの科学——古神道の宇宙観と人間観

「あじまりかん」の五つの特徴

「あじまりかん」と神Ⅱ大元霊の関係

「あじまりかん」はスマホのように使うもの

「あじまりかん」は合気道と同じである

「あじまりかん」の秘密を完全公開する

「あじまりかん」の歴史の実態(事実)

「あじまりかん」の歴史の意味

「あじまりかん」というコトバの意味

「あじまりかん」の霊的本質——正解は山陰神道に伝承されていた！

「あじまりかん」解明にかかった時間

「あじまりかん」が効く理由

「あじまりかん」の意識状態

「あじまりかん」の安全性と普遍性

「あじまりかん」によるミロク世本番の開始

出口王仁三郎師の「珍の御宝」預言

「あじまりかん」で「とどめの神」を地上に留める！
渦の御宝「あじまりかん」で人類の未来は明るい！

第三章 「あじまりかん」の証言

「あじまりかん」質疑応答

「あじまりかん」効果の実感(何日？ 何回？)

好転反応が出た場合の対応方法

好転反応で発熱した時の対処方法

「あじまりかん」の発声方法やリズム、回数、場所

運命的に辛い時の「あじまりかん」

「あじまりかん」で起きる「波動調整」について

実践者のあじまりかん体験

「あじまりかん」の響きが不思議

神社で唱えると不思議な感覚になる

言霊のパワーを感じる

自分のオーラを「ほわっ」と感じる

波動の高さを実感

エネルギーが腹に落ち着く

安心感と幸福感がある

至福のエネルギーで宇宙と一体感

唱えるとすぐに来るエネルギー

暖かい気持ちになる

あじまりかん玉を飛ばしたら思わぬお蔭が！

「あじまりかん」と「自霊拝」の関係

自霊拝の意味とやり方について

自霊拝とあじまりかんとの関係

『アジマリカンの降臨』コンテンツ放送とは

146 145 142

『アジマリカンの降臨』コンテンツ放送で「大元霊」を受信した！

あじまりかんと大元霊の関係

「あじまりかん」大元霊の意味するところとは

第四章 「あじまりかん」の階梯^{かいてい}

「あじまりかん」で天井を突き抜ける！

私は如何にして「あじまりかん行者」となったか

「あじまりかん行者」の意味とは

「あじまりかん」を唱えたら「あじまりかん」の秘密が解けた

「あじまりかん」を唱えたらイエスが現れた！

イエスには「あじまりかん」の教えがなかった

人類が「あじまりかん」意識に突入するということ

「あじまりかんで神になる」の真意

「あじまりかん」そのものがあなたの師匠（守護神）である

「あじまりかんの渦」が生まれた瞬間

「あじまりかん」こそが「一厘の仕組」である

178 174 173 170 167 162 160 158 157 154 150

「あじまりかん」の光で過去の神秘体験を照らす

「あじまりかんシステム」を設計したのは誰か？

佐藤定吉博士の『日本とはどんな国』がすごい！

斎藤の「日本神国観」は佐藤博士以上に明確である

玉手箱こそが真実のアーク（聖櫃・契約の箱）である

第五章 「あじまりかん」の時代背景

「あじまりかん」が登場した時代背景

誤った歴史認識

誤った科学

誤った宗教

すべては正しい歴史認識から始まる——関裕二史観の概要

面白く説得力があること

古代史のカバー範囲が広いこと

実在した人間の歴史を活写していること

整合性があり蓋然性が高いこと

常にチャレンジし続けていること

聖徳太子は蘇我入鹿であつた

中臣鎌足は滅亡百済の王子豊璋だった

蘇我氏が善玉で中大兄皇子と中臣鎌足が悪玉である

ヒミコは後継者トヨに殺された

浦島太郎は実在した

応神天皇は神武天皇である

ヤマトタケルは長髓彦である

東側主導でヤマトが建国された

伊勢神宮の本当の神はアメノヒボコである

日本書紀のアメノヒボコ抹殺の手法——日本建国史の三重スパイラル化

まことの神の経緯は生きた人間によって遂行される

アインシュタインにまつわる二つの大きな誤り

「アインシュタインの予言」は嘘である

「アインシュタインの特殊相対性理論」は間違いである

山陰神道の一つの大功績と三つの誤り

246 244 239 236 233

「あじまりかん」を伝承したことは偉大な功績である

山陰神道は「あじまりかん」の創始者アメノヒボコを忘れてしまった！

山陰基央師「人間は大元霊を知ることとはできない」は誤り

修行の種類が多すぎる

偉大な先代・山陰基央師を超えていけ！

第六章 「とどめの神」がすべてをひっくり返す

248

大元霊からのメッセージ

251

「あじまりかんの道」と「合氣の道」は同じである

252

正月早々『植芝盛平先生口述 武産合氣』にビックリ

255

斎藤と植芝盛平翁の違い

258

「天の浮橋に立つ」ということ

261

「二厘の仕組」は戦前に既に解かれていた

262

「あじまりかんの道」とは「大元霊システム」である

267

とことん「あじまりかん」を唱えるだけ

268

「あじまりかん」は必ず全人類を救済する！

佐藤定吉博士の人類救済ダイヤグラムを検証する

全人類救済ダイヤグラムにはキリスト教は不要である

人類の総意を「あじまりかん」に糾合せよ！

「あじまりかん」を日本学の基礎とせよ！

日本学のお寒い現状を憂う

佐藤定吉博士の『日本とはどんな国』が日本学の基礎概念を与えてくれた

なぜ日本は神の国で世界の中心の国なのか

みろくの世は既に始まっている

みろくの世が「あじまりかん」で開始された！

地球1万年の大計とは……

「みろくの世」そのものの神界が地上に降りてくる

かかってくるなさい!!——イシヤ殿への挑戦状

大本神芝居のエピローグ——日本建国の型から学ぶ

大本の型は陰陽逆転——ミロク世本番は陽陰の型で進行中

イシヤ殿、次はあなた方が「あじまりかん」する番だ

第一章

ミロク世のための神話

私は「神話」ならぬ「神」の力で突き動かされた

筆者の手元に、ジョーゼフ・キャンベル&ビル・モイヤーズの『神話の力』（早川書房）という本がある。かつて、この本を読むことを、日頃懇意にしている出版コンサルタントの岡山氏から勧められた。ところが、読もうとしても気乗りがせず放っておいたのだ。

私は現在に至るも『神話の力』をパラパラとページをめくるような感じでしか見ていない。それには、私なりの大きな理由があった。

一言で言えば「私自身が圧倒的な神話の力で動かされている」という自覚があったからだ。「自分は浦島太郎の再来であり、自分の人生は神話そのものだ」と思っていたからである。そのため、人の書いた神話の本を読む気にはならなかったのだ。

神話というのは、神の話である。私を動かしていた神とは、日本の歴史の中に埋もれていた神である。その神の名は「アメノヒボコ」。神とはいいが、実際には2世紀から3世紀にかけて生きた実在の人物だ。皇室の祖先でもある極めて重要な人物だ。

事は、筆者が学生時代に入信した新興宗教「生長の家」の神が住吉大神だったことに発す

る。「生長の家」をやっている時には、古代日本史のことをほとんど分かっていなかったの
で、「住吉大神は住吉大社の神さまだよな」程度の知識しかなかったのだ。

ところがどっこい、住吉大神は正体を抹殺された神であり、他にも実に多くの名前を持っ
ていたのだ。おとぎ話の浦島太郎であり、武内宿禰^{すくね}であり、塩土老翁^{しおつちのおじ}であり、気比大神^{けひ}Ⅱ
ツヌガアラシトであり、猿田彦大神であり、といった調子である。この知識を得たのは、社
会人になってからのことだ。自分が実際に生きている乙姫さまから「浦島太郎」と呼ばれる
という体験（「乙姫さま」については後述）があり、その後、歴史作家の関裕二氏による古
代史解明本を読むようになった。その結果、自分が若い頃から住吉大神Ⅱアメノヒボコによ
ってグイグイと突き動かされていたことが分かったのである。

私は自分の人生が神の力で動かされていることを完全に自覚していたので、岡山氏から勧
められた『神話の力』を、ことさら読みたいとは思わなかったのである。

新しい「ミロク世神話」が必要である

「はじめに」で、聖書、大本、日月神示などの神典が「ミロク世のための神話」の提示に失

敗していると述べた。各神典について順に問題点を検討しよう。

現在の聖書は旧約聖書と新約聖書の合本である点に注視する必要がある。

旧約聖書の出発点はセム族の一神教の聖典である。その神は民族神であり、自民族の利益のみを目的とするローカルな神 $\parallel$ 相對神ではないという事情がある。旧約聖書の神はその根本において人類共通の神ではあり得ない。よって、旧約聖書からは人類共通の神話が生まれることはない。

新約聖書では、イエスの言葉を使えば「父なる神」が主たる神である。なぜか「母なる神」は隠れてしまっており、代わりにイエスの母マリアが母なる神の位置を占めているように見える。

このように新約聖書の神の定義は不明瞭であり、あげくのはてに「父と子と聖霊」の三位一体説（意味があるとは思えない！）が登場する始末である。それ以前に、新約聖書の物語は、そもそもイエスの母マリアの処女懐胎という異常出産からスタートする。異常出産が事実だったとしていることに不審を覚える。自然の法則を破ってイエスが処女から生まれる必要は全くないからだ。これは、「太陽光線が処女の子宮に射し込んで神の子を受胎する」という広く分布する古代神話（「日光感精神話」と呼ぶ）そのものである。そのような神話を事実として認めることが前提になっているので、新約聖書からも人類共通の神話は構成する

ことができない。

大本や日月神示が「ミロク世神話」の提示に失敗した最大の理由は、それらの神典が実際の歴史とリンクしていないからである。その意味では、正史せいしと呼ばれる日本書紀や神道の根本聖典とされる古事記も同様である。

日本書紀は、持統天皇&藤原不比等によって大和建国から飛鳥時代までの史実（要するに古代史の全体）が偽造されており、一体誰がどのようにして日本を建国したのか不明である。正史とは正しい歴史という意味ではなく、日本書紀編纂時の受益者である持統天皇&藤原不比等から見ても都合が良い歴史という意味しかない。

古事記は日本書紀に先立って天武天皇の命で編纂されたことになっているが、大和岩雄氏らによる最近の研究では、太安万侶おおのやすまろの子孫である多人長おほのひとながや秦氏によって平安時代に編纂された偽書であることが明らかになってきている。要するに古事記は個人的に作られた歴史書に過ぎないのだ。

ただし、多氏は原古事記を所有していた可能性が高いとのことだ。元になった何らかの原典は存在していたのである。その点は日本書紀より多少みしたが、肝心の歴史記述は日本書紀をなぞるものでしかないのだ、正しい歴史ではない。日本書紀の記述が百済くだらびいきなのに対して、古事記は新羅しらぎびいきであるところに編纂者の命がけの反骨精神が出ているところは

評価できる。だが、実際の歴史とリンクしない点は日本書紀と同様である。

さてここまで書いてきて、ようやく筆者の論点である「ミロク世神話」の核心、「実際の歴史とリンクする人物」の出番となった。その人物こそ、浦島太郎ことアメノヒボコなのである。

先に「イエスの処女受胎による誕生は日光感精神話そのもの」であると述べた。実は、アメノヒボコが朝鮮半島にいた時に、次のような日光感精で玉から生まれた女を見つけて妻にした話が語られる。

新羅の阿具沼で女が昼寝をしているとき、女の陰部に太陽の光が虹となって射し込んだ。そして女は赤い玉を産む。それを見ていた卑しい男が、その赤玉を乞い願って貰い受けた。

ある時その男が牛を連れて日矛の前を通りかかった。日矛はその男が、山に行つて牛を殺して食べるつもりだろうと、訝いぶかつて捕らえようとす。男は、事情を説明しても、日矛はいっこうに許してくれそうにない。そこで男は持つていた赤玉を日矛に譲ること、
でようやく釈放された。

玉を持ち帰った日矛は玉を床に置いておくと、ある日、玉は美しい乙女となって日矛

の前に現れた。乙女は日矛の妻となった。

話はそれだけでは終わらず、最後にアメノヒボコは妻に逃げられてしまったという顛末である。これは古代人が大好きな「あるある話」なので気にすることはないのだが、要するにアメノヒボコは神話の世界の人物だと言っているのだ。

この話で不審に思うのは、「アメノヒボコが日光感精で生まれたのではなく、妻が日光感精で生まれた」というところだ。そもそも、アメノヒボコの名は彼自身が太陽神の顕現であることを意味しているからだ。だから神話としては、アメノヒボコはイエスのように処女懐胎（または日光感精）で生まれるのが正しい。古代の伝承記録者がアメノヒボコの本質をよく分からずに、あるいは、彼の正体を抹殺するために、適当に話をこしらえたとは思えないのである。

浦島太郎はアメノヒボコである

昔昔、浦島は助けた亀に連れられて、龍宮城へ来て見れば、絵にもかけない美しさ。

皆さんご存じの童謡「浦島太郎」の歌詞である。

ところで、この浦島太郎の物語の結末であるが、太郎の立場から見ると、随分理不尽な結末である。これでは、浦島太郎がかわいそう過ぎる。浦島太郎はネット投票「結末が納得いかない日本昔話ランキング」でも1位である。

浦島太郎は龍宮城に少し長居しすぎただけであって、特に悪いことをした様子はない。それなのに、故郷に帰ったら誰も見知った人がいなくなっており、ただ悲しくて寂しくて玉手箱を開けたら白い煙が出てきて、お爺さんになってしまったという。

亀を助けたという最初の善行にもかかわらず、最後に玉手箱を開いたらお爺さんになっちゃったという落ちはひどすぎるのではないか。

ここからは真面目な話である。この浦島太郎のお伽話は、確かに不条理に満ちた物語になっている。古代の人々は、浦島太郎が実在した人物であると考えていたようで、日本書紀



浦島太郎の理不尽な結末

をはじめ、丹後国風土記、万葉集、御伽草子などに記録されている。

この浦島太郎にはモデルとなった人物がおり、その人物に関して正史である日本書紀は正体を抹殺してしまった。そのため、心ある人々が伝承やお伽話の形式で真実の一片を語り継ごうとしたらしい。

浦島太郎のモデルとなった人物とは「アメノヒボコ」であるということを、解明してしまった人がいる。歴史作家の関裕二氏である。

氏は「古代日本史の秘密はあらかた解き明かしてしまった」と豪語する。

筆者は氏の著作をすべて読んでいるが、彼の発言は大袈裟ではなく、彼が本当に古代日本史を解き明かしてしまったと認識している。つまり、関裕二氏の古代史ワールドでは、既に古代日本史が確定してしまったか確定が目前であるという意味だ。

浦島太郎については、以下の2冊が薦めだ。

『浦島太郎は誰なのか』（ベストセラーズ）…そのものズバリの著作
『アメノヒボコ、謎の真相』（河出書房新社）

アメノヒボコ＝武内宿禰の子である応神天皇については、

『応神天皇の正体』（河出書房新社）

アメノヒボコの奥さんⅡ神功皇后については、

『台与とよの正体』（河出書房新社）

興味のある方は、それらの著作を参照されたい。

本書は、古代日本史の謎の核心部分、さらに、古代日本史と神々の関連性を解き明かそうとするものである。

古代日本史と神々が関連しているということには理由がある。なぜなら、神の世界や霊の世界と古代史の世界がつながっているからである。

筆者は既に還暦を過ぎており、学生時代から40年以上もの間、日本の神の探求を続けてきた。

神の探求は、一般的には宗教的な研鑽けんさんや修行を通じて行うものだという通念がある。だが、筆者の場合は少し違っていた。宗教もさんざんやったが、そこには自分が求める神はいなかったのである。主に学生時代にいくつかの新興宗教を遍歴へんれきしたのだが、その世界に長居しても筆者の求める日本の神の正体が分からなかったのだ。